

道草

旭川市立光陽中学校 三年 坂田 穰

一枚の紙を見つめながら、ぼくの思考回路は停止したままだった。鉛筆を握った手に無意識に力が入り、鼻の頭から汗がじわりと吹き出てくるのが分かった。紙には第一志望と第二志望を書く欄があるのに、ずっと空白のままだった。

「書いた人から提出してください」

先生の野太い声で我に返り、慌てて空白を埋める。元々字はきれいじゃないけど、輪をかけて情けない文字が紙の上で踊っていた。急いで埋めた文字。実際にその高校に入学して、楽しく充実した学校生活を送れるのか？確信を持ってない。ぼくの人生、これからどうなっていくんだろう。幼い頃は、何にでもなれると信じていた。けど、色んなことを知るうちに「やっぱり無理かも」と自分で蓋をするようになって、本当は何になりたいのか、何をしたいのか分からなくなってきている。

そして、考えているとなぜか嫌になってきた。なんだったっていい。どうだったっていいんじゃないか？なんでなんでもよくないんだ……？

大好きな父。朝早くから夜遅くまで働きながら、母と一緒にぼくの世話をしてくれた。自転車に乗れるようになったのも、自分でパンクを直せるようになったのも父のおかげ。音楽アーティストのこと、映画の話、格闘技の話など話題が豊富。勉強を教えてくれることもある。

「今の仕事を辞めて、職人になりたいんだ」

ぼくがまだおなかの中にいた頃、父はそう、母に切りだしたそうだ。心の準備もできないままに、重要な話を出されたにもかかわらず、母は「やってみたら」と返したのだそう。元々ものづくりが好きで大学も工芸ができるところに行きたかったことを知っていたので、反対できなかったのだそう。幸い、希望通り家具会社に入ることができ、そこで勤めながら父は難しい一級技能士の試験に合格した。

木製の家具や小物に囲まれて育ったせい、木が大好きだ。木から、感じのいい椅子やテーブルを作る父が誇りだった。

「みんなに報告があります」

ある日曜の夕食の時のことだった。父が切りだした。なんだろう？どうしたんだ？

「父さんは、学校の先生になります」

ガッコウノセンセイ……？一瞬言葉が漢字で変換されず、訳が分からなかった。

「中学校で技術の先生になります」

事故でちょっとだけ短くなってしまった指をさすりながら父は続けた。横で母が微笑んで「四〇代の転職だから出世コースは無理だけどね」と言った。

大学を卒業してから、全く違う仕事に三回ついた父。学校の先生になることは、全く考えられなかったそうだ。道草をしながらゆっくりと歩いてきた父は、大学で学んだ教育の道を選んだのだ。

「道草で新しい道をつくる」これが、父の歩んできた道を後ろから見してきたぼくの、今のところの結論だ。頭の中は、まだ朝靄がかかったようだけど、未来なんて分からない。だけどすぐに明確な答えは必要ない。手探りで、興味を持ったことに挑戦して少しずつ答えが見えればいい。いや、結局見つからなくてもいいのかもしれない。まあ、「なるようになれ」だ。道の真ん中に大きな石があったら、登るか、どかすかだ。いやなら避けて、別の道を通ってもいい。大きな木があったら何を作れるか考えてみよう。どうせなら誰も通ったことのない道を通ってみよう。

ぼくの冒険はこれから始まる。